

令和四年度入学試験問題 国語（五十分）

二月一日（午前） 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は16ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督かんとくの先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

生まれて初めて、一人でバスに乗った。

家族でデパートに買い物に行くときに、いつも使う路線だ。ものごころついた頃から、月に一度は乗っていた。五年生になってからは親と一緒にいるところを友だちに見られるのが嫌だったので、バス停でも車内でも、わざと両親と離れて——一人で乗っていた。

だから、だいじょうぶだ、と思っていた。だいじょうぶじゃないと困るんだ、とも自分に言い聞かせていた。もう五年生の二期なんだから。同級生の中には、バスどころか電車にも一人で乗って進学塾に通っているヤツもたくさんいるんだから。

でも、^①いままでの「一人」と今日の「一人」は違っていた。『本町一丁目』のバス停に立っているときから緊張で胸がどきどきして、おしっこをがまんしすぎたあとのように、下腹が落ち着かない。

やっとバスが来た。後ろのドアから乗り込んで、前のドアから降りる。手順はすっかり覚え込んでいるはずだったのに、整理券を取り忘れそうになった。

(中 略)

バスは中洲のある川に架かった橋を渡って、市街地に入る。西にかたむいた太陽が街ぜんたいを薄いオレンジ色に染めている。次は大病院前、大病院前、と車内アナウンスが聞こえた。お降りの方はお手近のボタンを押して……とつづく前に、ボタンを押した。急いで通路を前に進み、バスがまだ走っているうちに運賃箱のそばまで来た。

「停まってから歩かないと」

運転手に強い声で言われた。「転んだらケガするし、他のひとにも迷惑だろ——まだ若い運転手は、制帽を目深にかぶって前をじっと見つめたまま、少年のほうには目も向けなかった。

数日後、父からバスの回数券をもらった。「十回分で十一回乗れるから、こっちのほうが得なんだ」——十一枚綴りが、二冊。^②「だいじょうぶだよ」父はコンビニエンスストアの弁当をレンジに入れながら、少年に笑いかけた。「これを全部使うことはな

いから」

「ほんと?」

「ああ……まあ、たぶん、だけど」

③ 足し算と割り算をして、カレンダーを思い浮かべた。再来週のうちに使いきる計算になる。

「ほんとに、ほんと?」

低学年の子みたいにしつこく念を押した。父は怒らず、かえって申し訳なさそうに「だから、たぶん、けどな」と言った。電子レンジが、チン、と音をたてた。

「よし、ごはんだ、ごはん。食べるぞっ」

父は最近おしゃべりになった。なにをするにもいちいち声をかけてくるし、ひとりごとや鼻歌も増えた。お父さんも寂しいんだ、と少年は思う。

(中 略)

二冊目の回数券が終わった。使いはじめるとあつけない。一往復で二枚ずつ——一週間足らずで終わってしまう。まだ母が退院できそうな様子はない。

「回数券はバスの中でも買えるんだろ。お金渡すから、自分で買うか?」

「……一冊でいい?」

④ ほんとうは訊きたくない質問だった。父も答えづらそうに少し間をおいて、「面倒だから二冊ぐらい買っとくか」と妙に

A 口調で言った。

「定期券にしなくていい?」

「なんだ、おまえ、そんなのも知ってるのか」

「そっちのほう回数券より安いんでしょ?」

⑤ 定期券は一カ月、三カ月、六カ月の三種類ある。父がどれを選ぶのか、知りたくて、知りたくなくて、「定期って長いほうが得なんだよね」と言った。

「ほんと、よく知ってるんだなあ」父はまたおどけて笑い、「まあ、五年生なんだもんな」とうなずいた。

「……何カ月のにする？」

「お金のことはアレだけど……回数券、買っとけ」

父はそう答えたあと、「やっぱり三冊ぐらい買っとくか」と付け加えた。

次の日、バスに乗り込んだ少年は前のほうの席を選び、運転席をそっと覗き込んだ。あのひとだ、とわかれると、胸がすぼまつた。^⑥

初めてバスに一人で乗った日に叱られた運転手だった。その後も何度か、同じ運転手のバスに乗った。まだ二冊目の回数券を使いはじめたばかりの頃、整理券を指に巻きつけて丸めたまま運賃箱に入れたら、「数字が見えないとだめだよ」と言われた。叱る口調ではなかったが、それ以来、あのひとのバスに乗るのが怖くなった。たとえなにも言われなくても、運賃箱に回数券と整理券を入れてバスを降りるとき、いつもムスツとしているように見える。

嫌だなあ、運が悪いなあ、と思ったが、回数券を買わないわけにはいかない。『大学病院前』でバスを降りるとき、「回数券、ください」と声をかけた。

運転手は「早めに言ってくれないと」と顔をしかめ、足元に置いたカバンから回数券を出した。制服の胸の名札が見えた。「河野」と書いてあった。

「子ども用のでいいの？」「……はい」「いくらのやつ？」「……百二十円の」

河野さんは「だから、そういうのも先に言わないと、後ろつかえてるだろ」とぶつきらぼうに言って、一冊差し出した。「千二百円と、今日のぶん、運賃箱に入れて」

「あの……すみません、三冊……すみません……」

「三冊も？」

「はい……すみません……」

大きくため息をついた河野さんは、「ちょっと、後ろのお客さん先にするから」と少年に脇にどくよう顎を振った。

少年は頬を赤くして、他の客が全員降りるのを待った。お父さん、お母さん、お父さん、お母さん、と心の中で両親を交互に呼んだ。助けて、助けて、助けて……と訴えた。

客が降りたあと、河野さんはまたカバンを探り、追加の二冊を少年に差し出した。

代金を運賃箱に入れると、「かよってるの?」と、さっきよりさらにぶっきらぼうに訊かれた。「病院、かようんだったら、定期のほうが安いぞ」

わかっている、そんなの、言われなくたって。

「……お見舞い、だから」

かほそい声で応え、そのまま、逃げるようにステップを下りて外に出た。全然とんちんかんな答え方をしていたことに気づいたのは、バスが走り去ってから、だった。

夕暮れが早くなった。病院に行く途中で橋から眺める街は、炎が燃えたつような色から、もっと暗い赤に変わった。帰りは夜になる。最初の頃は帰りのバスを降りるときに広がっていた星空が、いまはバスの中から眺められる。病院の前で帰りのバスを待つとき、いまはまだかろうじて西の空に夕陽が残っているが、あとしばらくすれば、それも見えなくなってしまうだろう。

⑧ 買い足した回数券の三冊目が——もうすぐ終わる。

少年は父に「迎えに来て」とねだるようになった。車で通勤している父に、会社帰りに病院に寄ってもらって一緒に帰れば、回数券を使わずにすむ。

「今日は残業で遅くなるんだけどな」と父が言っても、「いい、待ってるから」とねばった。母から看護師さんに頼んでもらって、面会時間の過ぎたあとにも病室で父を待つ日もあった。

それでも、行きのバスで回数券は一枚ずつ減っていく。最後から二枚目の回数券を——今日、使った。あとは表紙を兼ねた十一枚目の券だけだ。

明日からお小遣いでバスに乗ることにした。毎月のお小遣いは千円だから、あとしばらくはだいじょうぶだろう。ところが、迎えに来てくれるはずの父から、病院のナースステーションに電話が入った。

「今日はどうしても抜けられない仕事が入っちゃったから、一人でバスで帰って、って」
看護師さんから伝言を聞くと、泣きだしそうになってしまった。今日は財布を持って来ていない。回数券を使わなければ、家に帰れない。

母の前では涙をこらえた。病院前のバス停のベンチに座っているときも、必死に唇を噛んで我慢した。でも、バスに乗り込み、最初は混み合っていた車内が少しずつ空いてくると、急に悲しみが胸に込み上げてきた。シートに座る。窓から見えるきれいな真ん丸の月が、じわじわとにじみ、揺れはじめた。座ったままうずくまるような格好で泣いた。バスの重いエンジンの音に紛らせて、うめき声を漏らしながら泣きじゃくった。

『本町一丁目』が近づいてきた。顔を上げると、車内には他の客は誰もいなかった。降車ボタンを押して、手の甲で涙をぬぐいながら席を立ち、ウインドブレーカーのポケットから回数券の最後の一枚を取り出した。

バスが停まる。運賃箱の前まで来ると、運転手が河野さんだと気づいた。それでまた、悲しみがつのった。こんなひとに最後の回数券を渡したくない。

整理券を運賃箱に先に入れ、回数券をつづけて入れようとしたとき、とうとう泣き声が出てしまった。

「どうした？」と河野さんが訊いた。「なんで泣いてるの？」—— B ではない言い方をされたのは初めてだったから、逆に涙が止まらなくなってしまうた。

「財布、落としちゃったのか？」

泣きながらかぶりを振って、回数券を見せた。

じゃあ早く入れなさい——とは、言われなかった。

河野さんは「どうした？」ともう一度訊いた。

その声にすうっと手を引かれるように、少年は嗚咽交じりに、回数券を使いたくないんだと伝えた。母のこともしゃべった。新しい回数券を買うと、そのぶん、母の退院の日が遠ざかってしまう。ごめんなさい、ごめんなさい、と手の甲で目元を覆った。警察に捕まってもいいから、この回数券、ほくにください、と言った。

河野さんはなにも言わなかった。かわりに、小銭が運賃箱に落ちる音が聞こえた。目元から手の甲をはずすと、整理券と一緒に

に百二十円、箱に入っていた。もう前に向き直っていた河野さんは、少年を振り向かず、「早く降りて」と言った。「次のバス停でお客さんが待ってるんだから、早く」——声はまた、ぶっきらぼうになっていた。

次の日から、少年はお小遣いでバスに乗った。お金がなくなるか「回数券はまだあるのか？」と父に訊かれるまでは知らん顔しているつもりだったが、その心配は要らなかった。

三日目に病室に入ると、母はベッドに起き上がって、父と笑いながらしゃべっていた。会社を抜けてきたという父は、少年を振り向いてうれしそうに言った。

「お母さん、あさって退院だぞ」

退院の日、母は看護師さんから花束をもらった。車で少年と一緒に迎えに来た父も、「どうせ家に帰るのに」と母に笑われながら、大きな花束をプレゼントした。

帰り道、「ぼく、バスで帰っていい？」と訊くと、両親はきよとした顔になったが、「病院からバスに乗るのもこれで最後だもんなあ」「よくがんばったよね、寂しかったでしょ？ ありがとう」と笑って許してくれた。

⑩「帰り、ひよつとしたら、ちよつと遅くなるかもしれないけど、いい？ いいでしょ？ ね、いいでしょ？」

両手で拝んで頼むと、母は「晩ごはんまでには帰ってきなさいよ」とうなずき、父は「そうだぞ、今夜はお寿司すしとるからな、パーティーだぞ」と笑った。

バス停に立って、河野さんの運転するバスが来るのを待った。バスが停まると、降り口のドアに駆け寄って、その場でジャンプしながら運転席の様子を確かめる。

何便もやり過ごして、陽が暮れてきて、やっぱりだめかなあ、とあきらめかけた頃——やっと河野さんのバスが来た。間違いない。運転席にいるのは確かに河野さんだ。

車内は混み合っていたので、走っているときに河野さんに近づくことはできなかった。それでもいい。通路を歩くのはバスが

停まつてから。整理券は丸めてはいけない。

次は本町一丁目、本町二丁目……とアナウンスが聞こえると、降車ボタンを押した。ゆっくりと、人差し指をピンと伸ばして。バスが停まる。通路を進む。河野さんはいつものように不機嫌な様子で運賃箱を横目で見ていた。

目は合わない。それがちよつと残念で、でも河野さんはいつもこうなんだもんな、と思い直して、整理券と回数券の最後の一枚を入れた。

降るときには早くしなければいけない。順番を待っているひともいるし、次のバス停で待っているひともいる。

⑪ だから、少年はなにも言わない。回数券に書いた「ありがとうございます」にあとで気づいてくれるかな、気づいてくれるといいな、と思いながら、ステップを下りた。

(重松 清『バスに乗って』より)

※ 出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 ——線部①「いままでの『一人』と今日の『一人』は違っていた」とありますが、どう違うのですか。(1)「いままでの『一人』と(2)「今日の『一人』」のそれぞれについて二十五字以内で説明しなさい。

問二 ——線部②「これを全部使うことはないから」とありますが、父はこのように伝えることで少年にどんなことをわかってほしいと思つていますか。三十字以内で答えなさい。

問三 ——線部③「足し算と割り算をして」とありますが、この計算の結果は何日分になりましたか。解答欄にあてはまる数字を答えなさい。

問四 — 線部④「父も答えづらそうに」とありますが、なぜ父は「答えづらそう」だったのか、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 回数券が一冊で足りるのかどうか、父にもまったく見当がつかなかったから。
- イ 冊数を増やすことは、少年にづらい思いをさせることだとわかっているから。
- ウ 少年がバスで回数券を買うのを苦手に思っていることを、知っているから。
- エ 回数券と定期券のどちらがいいか、父もとっさには計算できなかったから。

問五 本文中の A に入る語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 真面目まじめな
- イ 悲しい
- ウ 切ない
- エ おどけた

問六 — 線部⑤「父がどれを選ぶのか、知りたくて、知りたくなくて、『定期つて長いほうが得なんだよね』と言った」とありますが、少年はなぜこのように言ったのか、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 父が仕事や家のことで大変なのがわかっているため、むだをはぶいて父の助けになりたいと願ったから。
- イ 父がどの券を選ぶかを知るのがこわかったため、関係のない話題でそんな気持ちを紛まぎらそうと思ったから。
- ウ 父がもしも長い期間の券を選んだとしても、先に自分が言えば、父は得だから選んだと思える気がしたから。
- エ 父が長い期間通える券を選びたいのだとわかっていたため、そう答えやすくしてあげようと考えたから。

問七 — 線部⑥「胸がすばまった」とありますが、この時の少年の気持ちに最も近いものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア おどろき
- イ 腹立ち
- ウ いらだち
- エ 緊張きんちよう

問八 — 線部⑦「全然とんちんかんな答え方」とありますが、「とんちんかん」でない答え方をするとしたら、どのような答えになりますか。自分で考え、三十字以内で答えなさい。

問九 — 線部⑧「少年は父に『迎えに来て』とねだるようになった」とありますが、少年がこのようにねだって、バスの回数券を使いたくなかったのはなぜですか。本文中からその理由を述べた一文をさがし、初めの五字を答えなさい。

問十 — 線部⑨「こんなひと」とありますが、「こんなひと」とはどんなひとか、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 愛想のない態度で、相手におかまいなくずけずけとものを言うひと。
- イ 子どもに対して、平気で意地悪なことを言ったりしたりするひと。
- ウ 乗車のルールを守ることを何よりも優先し、違反を許さないひと。
- エ 一度失敗したら、その後も許さずにと叱ってくるようなひと。

問十一 文中の B にあてはまる語を、本文中から抜き出して答えなさい。

問十二 — 線部⑩「帰り、ひよっとしたら、ちよっと遅くなるかもしれない」とありますが、なぜ遅くなるかもしれないのですか。その理由を二十五字以内で答えなさい。

問十三 — 線部⑪「だから、少年はなにも言わない」とありますが、この時の少年の気持ちを説明した次の文の（Ⅰ）

（Ⅱ）に入る適当な語句を、それぞれ後の選択肢せんたくしから選び、記号で答えなさい。

「少年は、運転手河野さんの（Ⅰ）を知ることによって、彼の印象が大きく変わった。そして、この時、なにも言わなかったのは、（Ⅱ）ことで、河野さんの気持ちに応えようとしたのである。」

（Ⅰ）の選択肢

ア まじめさ イ きびしさ ウ やさしさ エ つよさ

（Ⅱ）の選択肢

ア 河野さんが注意してくれた事柄を、しっかり守ろうとする

イ 河野さんに対する感謝の気持ちを、文字にして確実に伝える

ウ 河野さんが運転するバスだけに乗り、自分の好意を示す

エ 河野さんへのこれまでのマイナスの感情を、そつと心にしまう

話を伝える工夫を考えるためには、まずその準備段階として、「B」という危機意識を持つ必要があります。「自分の話し方はこれで十分だ。誤解する相手のほうが悪い」と考えているうちは、伝え方はうまくならないでしょう。

話を確実に伝えられる環境作りも必要です。忙しそうにしている人に、こちらの都合で要件をまくし立てても、相手の耳には入りません。後で「えっ、そんな話、聞いてないよ」と言われるおそれもあります。

忙しい人が一息ついた頃をねらって話をするとか、Ⅱ、「今はお忙しいでしょうけれど、ちょっと手を止めて聞いていただけませんか」とか前置きする工夫が必要です。相手が聞こうとする環境を作った上で話をすれば、「言った言わない」の争いになることも防げます。

(中 略)

話すことと、書くこととは、どちらもことばを発信する行為という点で共通します。Ⅲ、先に「話すとき」について述べた内容は、「書くとき」にも該当する部分があります。誤解を避けるため、大事なところで念を押したり、2度繰り返したりするといった方法は、文章を書くときにも有効です。

ただ、話すときと比べると、書くときにはハンディキャップがあります。Cということです。

話をする人は、聞き手の頭の中までは分かりませんが、その表情や受け答えなどから、自分の話が理解されているか、あまり理解されていないかを推測できます。理解されていないな、と判断したら、「分かりにくかったようなので、補足します」とつけ足すこともできます。聞き手の集中力が落ちていると思ったら、関係ない余談を入れて、気分転換を図ったりもします。

Ⅳ、文章を書く場合、読者がどう反応しているかは、まったく分かりません。相手が誤解しているかどうかも見当がつかみません。仕事などで行き違いがあった場合、メールで連絡するよりも、電話で連絡した方が話が早くすむのはそのためです。相手の反応が分かりやすいのです。

読者の直接的な反応が分からないため、書くときには、話すときとは違った工夫が必要です。とりわけ大事なものは、「多義的なことば」を排除することです。④

多義的とは、そのことばが多くの意味に解釈される性質のことです。何年前にネットで話題になったフレーズに、「頭が赤い魚を食べた猫」というのがあります。言語学者の中村明裕さんが考えたもので、いろいろな意味に受け取られる、多義的なフ

リーズです。

⑤「頭が赤い魚を食べた猫」と言われたとき、頭が赤いのは、魚とも、また猫とも受け取られます。それだけでなく、想像をたくましくすれば、猫の頭がパカッと開いて赤色の魚を食べた可能性や、人の頭が猫になっていて、その猫が赤色の魚を食べた可能性、人の頭が真つ赤な色の猫になっていて、その猫が魚を食べた可能性などがあります。

会話で、「赤色の猫」を念頭に「赤い、魚を食べた猫」と発言し、相手から「赤い魚なの？」と言われれば、「いや、ごめん、赤いのは猫だよ」と訂正ていせいすることができません。書きことばでは、こうしたやりとりができません。そこで、話しことばよりも慎重しんじゆうに、ことばが多義的にならないように注意する必要があります。

私は、この第4章の冒頭ぼうとうを、次のように書き始めています。

「人と人がことばをやりとりすると、ちょっとしたこと『つまずき』が生まれます」

これは、実は、あれこれ考えて書き直した文なのです。最初の文は、こういうのでした。

「人とことばをやりとりすると、ちょっとしたこと『つまずき』が生まれます」

これでもいいのかもしれませんが。ただ、「人とことばをやりとりする」というところが多義的だと感じられました。この表現では、『人』および『ことば』を、誰かとやりとりする」という意味に受け取られる余地があります。

読者によって、さまざまな読み方があります。文章の表現が悪いと、筆者の意図しないとんでもない意味に受け取る人が出てくるかもしれません。そういう事態を避けるため、ちょっとでもひっかかる表現があったら、つとめて修正していくのが望ましい姿勢です。

文章を書きあげたら、広く発表する前に、周りの誰かに読んでもらうことも大事です。その人が自分の意図と違う受け取り方をしていないか、いろいろ質問して確かめてみるといいでしょう。

(飯間浩明『つまずきやすい日本語』より)

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 本文中の [I] 〔 〕 [IV] に適する語を次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア あるいは イ つまり ウ たとえば エ したがって オ なぜなら カ ところが

問二 — 線部① 「相手に予備知識がないことについて話す場合は、よほど工夫して話す必要があります」とありますが、本文中に紹介しょうかいされている話し方の「工夫」を二つ「〜」という工夫につづく形で、文中のことばを用いて、それぞれ二十字以内で答えなさい。

問三 本文中の [A] にあてはまる語句として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「AがBではない」ということがたいへんよくわかりました。

イ 「AがBである」ということがたいへんよくわかりました。

ウ 「AがBであるかどうか」ということがよくわかりませんでした。

エ 「AがBである」ということがよくわかりませんでした。

問四 — 線部② 「こういうことがあって以来」とありますが、どのようなことがあったのですか。このこと具体的な内容をまとめて説明している部分を文中から三十文字以内でそのまま抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問五 本文中の [B] にあてはまる語句として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分のことばは相手に伝わらないかもしれない イ 相手のことばを自分は誤解しているかもしれない

ウ 自分は伝えたいことを正しく話せないかもしれない エ 相手は自分のことばを聞いていないかもしれない

問六 本文中の [C] にあてはまる内容を、文中のことばを用いて十五字以内で答えなさい。

問七 — 線部③「そのため」とありますが、「その」が指し示す内容を分かりやすく言い換えている部分を「くため」につづくように、本文中から十五字以内でそのまま抜き出して答えなさい。

問八 — 線部④「とりわけ大事なものは、『多義的なことば』を排除することです」とありますが、書きことばにおいて「多義的なことば」の「排除」が「とりわけ大事」である理由を、話しことばの場合と比較しつつ、五十字以内で説明しなさい。

問九 — 線部⑤「『頭が赤い魚を食べた猫』と言われたとき、頭が赤いのは、魚とも、また猫とも受け取られます」とありますが、「頭が赤い魚を食べた猫」という表現を「頭が赤いのは、猫」という意味がはつきりと伝わるようにするためには、どのような語順にすればよいですか。「頭が／赤い／魚を／食べた／猫」を並べかえて答えなさい。

問十 — 線部⑥「話しことばよりも慎重に、ことばが多義的にならないように注意する必要があります」とありますが、具体的にはどのようなことをするのがよいのですか。これにあたることを二つ、それぞれ「くこと」につながるように文中から三十字以内で抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問十一 本文の内容として正しいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の伝えたいことが正しく相手に伝わらないのは、相手がきちんと聞かないからである。
- イ 話しことばは、その場で言い直すことができるので、書きことばよりも優れた伝え方である。
- ウ 伝える相手が目の前にいない書きことばの場合は、より慎重にことばを選ぶ必要がある。
- エ 伝え方の工夫は、話しことばと書きことばとはまったく異なるので、注意する必要がある。
- オ 話しことばも書きことばも、伝える相手の立場や気持ちを考えて伝えることが大切である。
- カ 伝える相手が、伝えられたことをさまざまに受け取る可能性を考えておく必要がある。
- キ 相手のことばを正しく受け取るためには、ことばの多義性に注意しなければならない。

三次の短文中の——線部のカタカナを、漢字になおしなさい。

- | | | | |
|---|--------------|----|-----------------|
| 1 | ゴウインに話を進める。 | 2 | 小鳥のスパコを作る。 |
| 3 | 王子様の役をエンじる。 | 4 | ソウイクフウを重ねる。 |
| 5 | 不純物をジヨキヨする。 | 6 | 五輪のために交通をキセイする。 |
| 7 | シヨウヒゼイをしたらう。 | 8 | 生命ホケンに加入する。 |
| 9 | ハンソク負けをしまった。 | 10 | 祖父のハカマイりをする。 |

令和四年度入学試験

二月一日(午前)

実施

東京女学館中学校



国語解答用紙

(字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。)

一問一 (1)

(2)

問二

問三

日分 問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

問十三

I

II

I

II

III

IV

問二

という工夫
という工夫

問三

問四

)

問五

問六

問七

ため

問八

問九

問十

)

ひん

)

ひん

問十一

三

9	5	1
10	6	2
り	7	3
	8	4
		じる

評	点



受 験 番 号

氏 名